

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	桑原 晴子
2. 審査委員	主査：（岡山大学教授） 上地雄一郎 副主査：（岡山大学教授） 安藤美華代 委員：（岡山大学教授） 大竹 喜久 委員：（兵庫教育大学教授） 松本 剛 委員：（兵庫教育大学教授） 岩井 圭司
3. 論文題目	身体とイメージの関連性に関する心理臨床学的研究 ー共時性の視点からー
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 桑原晴子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査 日時：平成29年2月28日（火）11：00～12：00 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 講義室2</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 本論文は、下記の4章から構成されている。</p> <p>第1章：問題と目的 第1節 身体とイメージの関連性に関する分析心理学的研究の展望 第2節 本研究の目的と構成</p> <p>第2章：イメージの心理療法における身体性に関する研究（研究1） 第1節 箱庭療法過程におけるからだ—ところを語る主体の生成(研究1－1) 第2節 箱庭療法過程におけるからだ—ところを語る言葉に実感が生まれるまで(研究1－2) 第3節 夢を用いた面接過程におけるからだ—箱庭療法事例との比較(研究1－3) 第4節 研究1のまとめ</p> <p>第3章：関係性のイメージとしての身体的逆転移に関する研究（研究2） 第1節 相談室モデルの心理療法における身体的逆転移（研究2－1） 第2節 アウトリーチモデルの心理臨床における身体的逆転移（研究2－2）</p>

第4章：総合考察

第1節 本研究の成果

第2節 ころとからだ、イメージの共時的連関モデル

第3節 本研究の問題点と今後の課題

本論文の各章の概要は以下の通りである。

本研究は、身体とイメージがどのように相互連関しているのか、そして「意味のある偶然の一致」かつ「非因果的連関の原理」としてJung(1952/1960)が定義した「共時性」という視点が、その関連性を理解する上でいかに有効であるかについて、7つの事例研究を通して検討したものである。著者の研究は、分析心理学（ユング心理学）に立脚しており、箱庭や夢といったイメージを媒介にした心理臨床実践に基づいた研究である。

共時性という視点から身体とイメージの関連性を理解することは、因果論的理解では行きづまる事例で生じているプロセスの意味を考えるうえで有意義であると考えられる。また、先行研究において具体的事例に基づいて論じられていない点が問題点として挙げられた。本研究の目的は、①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面、③面接のプロセスで生じる身体症状、④身体的逆転移、の4つの次元が心理療法のプロセスの中でどのように相互連関していくのかについて明らかにすることである。

第2章の研究1では、3つの事例研究を通して、①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面、③面接のプロセスで生じる身体症状、の3つの次元は、常に相互連関しながら変容していくこと、その相互連関は、いずれかが他の変化の原因になるというよりも、共時的な変化として理解できることを指摘した。そして、その共時的な変化に着目し、「意味のある偶然の一致」の心理的「意味」を内省することが、クライアントのあり方や心理療法の展開を理解するうえで有意義であることを論じている。さらに、3つの次元のうち、どの次元がより活性化されやすいかは、クライアントが生きているテーマによって異なることが示唆された。このように、共時性という視点は、ころとからだの複数の次元に現れてくる変化を全体状況とつなぎ、その意味を理解するという心理臨床的姿勢を促進する点において、心理臨床的意義があることを提言している。

第3章の研究2では、④身体的逆転移に焦点を当て、日本の心理療法における身体的逆転移の特徴と、相談室モデルとアウトリーチモデルという心理臨床実践の場の特徴による相違について検討を行っている。その結果、身体的逆転移を、クライアントとセラピストの関係性としての「からだ」、つまりイメージとして捉えることが重要であり、身体的逆転移と共時的に生成するイメージの自律的生成を見守りながら、その両者の共通点や意味を内省するという、セラピストの内的作業がクライアントの理解を促進することを提言している。また、無意識の一体感を基盤とする日本の心理療法の場合には、欧米とは異なり、身体的逆転移を直接クライアントとの間で言語化して話し合わなくても、セラピスト側の理解の変化が、非言語的態度の変化としてクライアントに伝わり、それが心理療法のプロセスに活かされる可能性を示唆している。

さらに、身体的逆転移をどのように心理療法の中で活かすかは、相談室モデルとアウトリーチモデルでは異なり、アウトリーチモデルにおいては、積極的に身体的逆転移を言葉にして共有していくセラピストの姿勢が有効であることが提言されている。

以上の通り、①イメージ内容の変化、②イメージ体験の身体的側面、③面接のプロセスで生じる身体症状という、3つの次元の共時的な相互連関について、詳細な事例研究に基づいて明らかにしたこと、特に、③面接のプロセスで生じる身体症状について、他の①イメージ内容の変化や②イメージ体験の身体的側面と相互連関していることは、先行研究ではほとんど焦点が当てられていなかった点であり、本研究における新たな知見であるといえる。また、3次元のどの次元が前景化するのかに影響する要因として、クライアントの生きている固有のテーマを示唆したこと、身体的逆転移を心理臨床の場の特徴や関係性のあり方に応じて柔軟に活用する必要性を提言したこと、クライアントだけでなくセラピストの3次元も共時的に相互連関しながら面接を深化させていくことを明らかにし、共時性という視点の意義を明らかにした点において、独創性を有する研究である。

2. 審査経過

審査においては、①共時性ということの臨床的意味、②共時性が生じているときのクライアントとセラピストの状態をどう理解するか、③クライアントの身体症状・イメージおよびセラピストの身体的逆転移（身体症状・イメージ）についてのセラピストの内省をクライアントに伝える場合と伝えない場合の違いと理由、④相談室モデルとアウトリーチモデルの区別の妥当性、⑤本研究は学校教育臨床にどう生かすことができるか、などについて議論が交わされたが、審査委員からの指摘や質問に対して、桑原晴子はすべて適切に回答し、自身の検討が不十分である点は率直に認めた。そして、この審査の過程は、審査委員にとっても有意義な情報が得られ、思索が深まるものであった。

3. 審査結果

Jungや他の心理療法家たちが理論的に検討しながらも具体的事例を通しては検討していなかった「共時性」というテーマについて、自分自身が関わったクライアントの事例を用いて臨床的論考を加え、新たな知見を得た点において、桑原晴子の研究は、独創性を有する研究であるとみなすことができる。また、本研究の結果は、分析心理学（ユング心理学）、箱庭療法を含む表現療法、心について適切に言語化できないクライアントやストレスとの関連で身体症状を呈するクライアントの心理療法のいずれの分野に対しても寄与するものであり、学校教育臨床に携わる専門家に対して実践的示唆を与えるものであると考えられる。よって、審査委員全員が、桑原晴子の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、合格と判定した。